

## ミズナラの構造材林作業法に関する研究

今田, 盛生

<https://doi.org/10.15017/14788>

---

出版情報 : 九州大学農学部演習林報告. 45, pp.81-225, 1972-03-30. 九州大学農学部附属演習林  
バージョン :  
権利関係 :

# ミズナラの構造材林作業法に関する研究

今 田 盛 生

Morio IMADA

Study on the High Forest System of MIZUNARA

(*Quercus crispula Blume*).

## 目 次

緒 言	ii 適用段階における基本的作業法
第1章 総 論	IV 総 括
I 研究の目的	i 理論上の基本的作業法
II 構造材林	ii 基本的作業法の単位林分に対する適用の基本方式
i 経済林の生産目的	第3章 作業法に関する実証的研究
ii 構造材林造成の目標	I 基礎研究
iii ミズナラ素材の用途	i ミズナラの林分結実量
iv ミズナラの構造材林	ii ミズナラ種子の発芽
III ミズナラ構造材林の育林技術上の基本的要件	iii ミズナラの母樹林分からの種子散布
i ミズナラの構造材林造成上考慮すべき樹性	iv 上木庇陰下におけるミズナラ稚苗の生育
ii ミズナラの構造用素材に要求される形質	v ミズナラ稚苗の根系
iii ミズナラ構造材林の育林技術上の基本的要件	vi 稚幼期のミズナラ密立林分における優勢木
IV 研究の方法	vii ミズナラ林の生長推移
V 試験・調査地の概況	II 応用研究
i 位 置	i 総 説
ii 気 象	ii 下種地拵試験
iii 地 況	iii 補播の施行方法
iv 林 況	iv 種子覆土試験
第2章 作業法に関する理論的研究	v 更新伐試験
I 総 説	vi 枝条整理試験
i 更新法の種類	vii 補植の施行方法
ii 伐採法の種類	viii 稚樹刈出試験
iii 作業法の種類およびその適用性	ix 除伐試験
II 技術上適用可能と認められる作業法	x 枝打試験
i 各作業法の適用可能性	xi 間伐試験
ii 技術上適用可能と認められる作業法	xii 総 括
III 適用段階における基本的作業法	第4章 基本的作業法の総括的考察
i 各作業法の経営的側面における差異	

- |                                     |                      |
|-------------------------------------|----------------------|
| 1) 基本的作業法における基本組織                   | 4) 基本的作業法適用林における森林構成 |
| 2) 基本的作業法の単位林分に対する適用方法の基準           | 5) 総括的考察<br>摘要       |
| 3) 基本的作業法適用による主伐期単位林分の林分構成および収穫材の目標 | 引用文献<br>Résumé       |

## 緒 言

近年、わが国においては、木材需要量が年々増加し、今後もこの傾向は持続するものと推測される。このような情勢に対処するため、木材総生産量の増大が叫ばれ、その一環として、広葉樹天然生林から針葉樹人工林への林種転換が急速に進められている。それにもなると、広葉樹資源は減少の一途をたどっており、広葉樹林の保続・育成が軽視されているような感がある。しかしながら、立地的に広葉樹林を針葉樹林に転換できない場合、あるいは広葉樹林として存続させる方が有利な場合、さらには将来の木材需要構造などから広葉樹林をあえて造成しなければならない場合すらも考えられる。広葉樹林から針葉樹林への林種転換は、わが国のみならず、今日の世界的傾向でもあり、また当面の問題解決の手段としては当然であるとしても、なお反面において、広葉樹資源の保続・育成がおろそかにされてよいことにはならないと考えられる。

また一面において、木材を原料とする第二次産業が発展し、それにもなると、工業原材料としての木材の需要量が増加してきている。工業原材料は組成物質の利用が目的であるため、形態のないしは材質的な良質性よりも、むしろ組成物質が多量であることが主として要求される。このような木材の需要構造の変革と総生産量の増大という情勢を反映して、量とともに重視されるべき質、すなわち良質材の生産がともすれば量の増産の背後にかくれて軽視されがちである。しかし、社会経済の進展にもなると、人々はよりよい生活環境を欲求することにより、天然生木材の自然の美しさを生かした良質構造材の需要は、わが国古来の民族的愛着と相まって、将来、増大するものと推測される。このような観点にたてば、将来、必要な木材が不足を生じても、林木の特性として生長期間が長く、急速にそれを生産することは不可能に近いことを考慮すると、将来の需要に対処するためには、現在において、その良質構造材の生産方法を検討しなければならない。したがって、大勢としては、現実的需要にこたえる量産技術に主眼がおかれる情勢にあっても、なお反面において、良質材生産技術を軽視すべきではないと考えられる。

ところで、北海道地方においても、以上のような全般的な情勢下にあって、天然生広葉樹林は皆伐され、トドマツ・エゾマツ・カラマツなどの針葉樹の拡大造林が進められるとともに、カラマツ・カンパ類・ハンノキ類・ポプラ類などを対象とし、主として量産技術の研究開発が進められている。しかしながら、北海道地方の広葉樹は、総蓄積5.3億 $m^3$ の約6割を占め、<sup>1)</sup>その中には、ミズナラ・ヤチダモ・カツラ、ニレ・カンパ類・シナノキ・センノキなどの有用樹種が多い。しかも、主として気候的要因により、その形質は本州産の広葉樹に比較してきわめて優良である。<sup>2)</sup>したがって、北海道地方はわが国の優良な広葉樹構造材の最もすぐれた生産地であり、<sup>3)</sup>またわが国では、優良な広葉樹構造材の生産は北海道地方に期待する以外にないともいわれている。<sup>4)</sup>そのため、最近では、これらの有用広